

本論文は、ニーチェ(1844-1900)が、『悲劇の誕生』第三版出版時に追加した「自己批判の試み」(1886)で、この書を「芸術家 = 形而上学(die Artisten-Metaphysik)」と名付けていること、並びに芸術を道徳の対抗軸と述べていることに注目し、「芸術家 = 形而上学」の内容を明らかにし、それが後期思想の中心概念である「力への意志 (der Wille zur Macht)」と「運命愛 (amor fati)」の理論の前提となっていることを示した。また「芸術家 = 形而上学」という観点からニーチェを解釈している和辻哲郎の『ニイチェ研究』(1913)についての比較思想的考察を加えることで、「芸術家 = 形而上学」を複眼的に理解することを目指した。

第1章では、『悲劇の誕生』をもとに、「芸術家 = 形而上学」の描く生成としての世界像を明らかにした。その際、特に「根源的一者 (das Ur-Eine)」という悲劇の誕生における二元論的思考の痕跡の一つとなってきた概念に着目し、それが一なる生成の世界を表す概念であることを示した。まずは、「根源的一者」が不動の一者ではなく、多数の蠢く芸術衝動の総体としての「根源 = 一」として考えられることを論じた。次に、衝動と仮象との関係について精査することで、衝動の根源的世界と、仮象の世界は異なる二つの次元なのではなく、衝動と仮象とが連続して運動を形成しているということを論じた。「根源 = 一」は不動の存在ではなくむしろ生成として世界を表す概念であり、「芸術家 = 形而上学」が示すのは、生成の形而上学であることを論じた。

第2章では、「芸術家 = 形而上学」の是認の側面を明らかにした。シレノスの知恵の示すペシミズムに対し、ニーチェは「現存在と世界は是認されているように見える」(GT, 24, S.152)という是認命題を提唱する。ギリシャ悲劇の鑑賞が、なぜ存在と世界の是認へと結びつくのかを本章で検討した。悲劇の観客は音楽がもたらすディオニュソスの陶酔状態においてコロスと一体化することで、舞台上に繰り広げられる世界の現存在の創造と破壊の運動を共に体験し、不協和音を含みつつも生成を続ける意志の力強さと快楽を感動として体験する。この美的体験が是認命題の核となっていることを示した。

第3章では、「力への意志」の理論形成の方法論について検討した。その際、近年勢いを増す英語圏におけるニーチェ研究の潮流をまずは概観した。カウフマン以来、英語圏のニーチェ研究は伝統的にニーチェを経験主義的心理学的な分析に基づき人間の本质を描き出す哲学者だと見做している。そのため、「力への意志」も人間心理を分析する過程で、帰納的に導き出された原理だと考える。このような見方では、ニーチェの「力への意志」が持つ、二つの側面に応えられないと考える。一つは、ニーチェが「力への意志」を内側からみた世界と述べている点であり、もう一つは「力への意志」の持つ世界論としての側面である。その2点は、「芸術家 = 形而上学」を前提としない限り出てこない論点であることを論じた。「力への意志」の形而上学というと、ハイデggerによる「近代主体の形而上学としての力への意志」という批判が有名である。しかしこの批判はニーチェの形而上学を生成ではなく、個的存在者の存在という観点から婉曲して解釈していることが否めない。むしろ、ニーチェの形而上学は、生成としての形而上学として「力への意志」論に結実していることを示した。

第4章では、「芸術家の形而上学」を支持する形而上学的側面が、「運命愛」に現れる生の肯定にどのような影響を与えたかを考察した。まず、ニーチェがなぜ芸術を道徳の対極にあると考えたのかを考察し

た。ニーチェのキリスト教道徳批判の意図を検討することで、ニーチェの批判の理由は、それがヨーロッパ世界のニヒリズムを引き起こすからだだと結論づけた。「力への意志」が道徳を生み出し、ついにはそれが虚無への意志を生み出す。しかし、「力への意志」そのものは生成を表す概念であり、新しい道徳の根拠にはならない。ニヒリズムを克服するためには、世界全体を美として捉える必要がある。「運命愛」の思想において、ニーチェは再び「芸術家形而上学」に帰還しているのである。

第5章では、和辻哲郎の『ニーチェ研究』を用いて比較研究を行った。和辻のニーチェ理解は、その後の仏教研究と共通する構造を持っている。和辻は「力への意志」を一元論的な世界形成力として解釈しており、それは後の和辻の思想「空の弁証法」の原型ともいえる。和辻はニーチェの哲学を、特に形而上学の扱い方において、西洋の学者とは異なる視点から読み解いている。西洋の形而上学の伝統から自由な和辻は、生成の世界論を把握することに成功している。一方でニーチェの生涯のプロジェクトであるペシミズム・ニヒリズムとの対決が持つ緊迫感や悲壮感については掴めていない。しかし、そのことを批判するのではなく、和辻自身の哲学ないしは日本の哲学を構築する始まりとして肯定的に捉えつつ、ニーチェ哲学それ自体やニーチェ哲学諸研究と比較することで、哲学そのものの孕む特殊性と普遍性について複眼的観点から考察した。